

魚のまち「復活」をめぐって



①サケ・マス漁が最盛期だった頃の釜石魚市場（昭和61年） ②たくさんの漁船が寄港する沿岸有数の港町として知られていた（昭和61年）
 ③マグロがとれることも珍しくなかった（昭和61年） ④平成7年の魚河岸祭りで賑わいを見せる ⑤平成8年ごろの釜石魚市場
 ⑥現在の釜石市魚市場

漁火が煌々と灯る港町

秋サケ不漁やホタテガイの貝毒など、非常に厳しい状態にあるのが現状です。地球温暖化による海水温の上昇が原因だと思えますが、ここまでサケが回遊してなくなるのは、誰もが予想してなかったことだと思えます。

定置網の売り上げは現在、年間1億円ほどですが、昭和60年代の一番とれた時は約12億円もありました。運送のトラックも、魚を積みすぎてフラフラで市場を出ていくというのはよく見る光景でした。市場も夕方までやっていて、夜も電気をつけなくても大丈夫なほど、漁火が灯っていました。県内どこもそういう雰囲気だったと思えます。

平成16年には、1000人ほどいた組合員数も、少子高齢化

の煽りを受けて、現在は400人足らずで、こうした担い手不足も課題です。

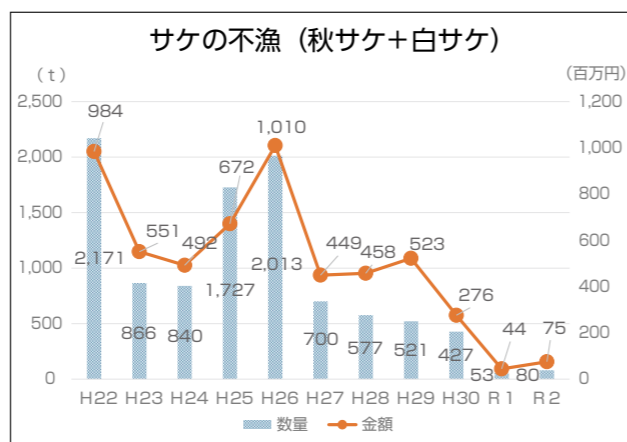
サクラマスの事業化に期待

魚がいないなど、先が見えない状況ではありますが、作った施設の整理も含め、上手くやっていかなければならないと思います。漁業従事者もどんどん少なくなっている中で、いかに人材を定着させるか、産業として復活させる動きが必要です。

そうした暗い話題の中でも、サクラマスが秋サケに取って代わるように、今年度の秋からはサクラマス養殖の事業化に向け、漁業権の取得を目指しています。サクラマスはひと際おいしいので、そのおいしさが市内ひいては全国に広まるようになることを期待しています。



釜石湾漁業協同組合
 代表理事組合長
 佐藤 雅彦



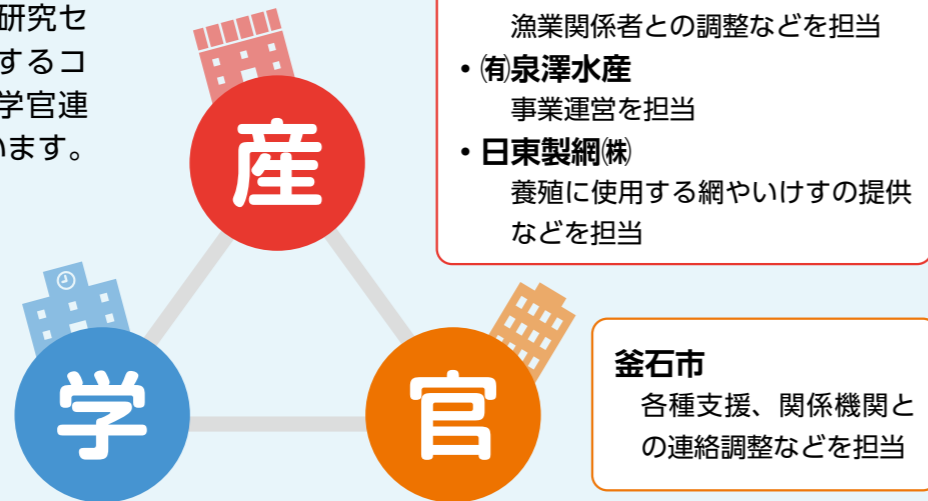
出典：釜石市漁業協同組合連合会作成 釜石漁連地方卸売市場水揚統計

漁業は古くから鉄鋼業と並び、産業の中核として釜石を支えてきました。しかし、近年の海況激変による水産資源の減少は、漁業者や水産加工をはじめとする水産食料品製造業など、産業活動全体に大きな影響を与えています。このような中、海洋環境の変化に影響を受けず、計画的な生産が期待できる海面養殖研究が注目され、令和2年から産学官が連携してのサクラマスの海面養殖試験研究が進められています。

今回は「魚のまち」の復活に向け「つくり育てる漁業」に取り組む人々にスポットを当てます。

釜石地域サクラマス海面養殖試験研究コンソーシアム

サクラマス養殖は、令和2年10月に岩手大学三陸水産研究センターを研究代表機関とするコンソーシアムを組み、産学官連携の取り組みで行われています。



岩手大学
種苗開発や各種調査、分析などを担当



岩手大学三陸水産研究センターセンター長

平井 俊朗



釜石独自のサクラマスの開発へ

地域の漁業の支援
岩手大学では、地域の漁業の支援と人材育成の観点から平成28年に釜石市に三陸水産研究センターを開設しました。これまでのとる漁業や無給餌養殖の高度化、商品の付加価値の向上、魚類養殖事業の研究という3本の柱に取り組みんでいます。その中で養殖事業は、海洋環境や天候に左右されず、安定的に海洋資源を確保することで、地域の水産業を支える新たな柱とすることを目指しています。現在、養殖研究を専門としている私は、サクラマスの種

種苗開発とは？
農作物などの品種改良のようなものです。同時期に産まれた個体の中で、優位なもの（人間が与える餌に抵抗がないもの、比較的穏やかなものなど）どうしを掛け合わせて、養殖に適した品種に改良します。ギンザケやトラウトサーモンなどはこの品種改良が進んでおりますが、サクラマスはまだまだ研究段階です。そのため、釜石独自のサクラマスをいかに作っていくかが今後大事になっていきます。

サクラマスを地域に根付かせるために
東京への出荷で名前を売り出していくのはもちろんですが、それと同時に、いかに観光などと結びつけて、まちの魅力として定着させていくかが大事だと思います。こういう中で、釜石の養殖の担い手が地元の網元さんだということは大きな強みです。いずれは、サクラマスに係る産業が地元根付き、若い人が定着するようになればいいですね。

サクラマスとは？

日本在来のサケ目サケ科の魚で、高級魚として珍重されています。釜石地域では「真鱒・ママス」と呼ばれ、マス類の中でも特別な魚とされてきました。同じく地方名で「サクラマス」と呼ばれる魚に「カラフトマス」があり、混同されることもあります。

サクラマスが海に出るまで

9～10月 産卵
12～1月 孵化
その後約1年半を川で過ごす
→ 一部が河川に残留（ヤマメ）
→ 4～6月に降海（サクラマス）



ヤマメ



サクラマス

これまでのサクラマス養殖試験研究

令和2年11月 釜石湾で試験養殖を開始

釜石湾で稚魚約1万尾の飼育を開始。



令和2年12月 試験養殖の計画・目標設定

この試験研究は、令和2年の夏から令和5年の秋までの期間を3期に分けて実施。令和3年5～7月に平均1・5kgのサクラマス8千尾を出荷する目標を設定。



令和3年6月 第1期水揚げ

海面養殖サクラマスの水揚げが行われ、約13トンの水揚げ。



令和3年11月 第2期目の稚魚を海へ

第2期の養殖試験研究を開始。稚魚約2万1千尾の飼育を開始。



令和4年5月 海面養殖サクラマス試食会

地元飲食店や水産加工会社25人が参加し、サクラマスの刺身と塩焼きを試食。



令和4年7月 第2期水揚げ&名称発表

第2期海面養殖サクラマスの水揚げが行われ、約30トンの水揚げ。同時に、海面養殖サクラマスの名称を「釜石はまゆりサクラマス」とすることを発表。



事業化へ

大量生産が可能に！

サクラマスを釜石の魚に

他地域との比較
 弊社は、こうした産学官連携事業に参画することが多いですが、特に釜石市はうまくいっていると感じます。大学や地元漁協、民間企業、自治体などが密に連携しあっているという印象

サクラマス養殖への関わり
 弊社は、国内外で展開している漁網メーカーです。以前から泉澤水産さん、平井先生とつながりがあり、サクラマスの養殖試験研究に参画しています。担当分野は、資材の設計、製造、供給というところはもちろん、こういった網をどこに設置した方がいいかということを考えています。
 海面養殖と言っても、どこでも設置できるわけではありません。潮流が穏やかで、水深が浅すぎず、航路の邪魔にならないという観点で、海面養殖の場所を選定しました。



日東製網株式会社 技術部総合網研究課 課長
 細川 貴志

目指すべき姿
 サクラマス養殖は、今後事業化し大規模になっていくと思います。
 皆さんの方に養殖という選択肢を持ってもらうことで、生産量が増えれば、流通や加工会社などへの更なる波及、ホテルや飲食店での提供など、観光を含めた動きが出てくると思います。
 養殖に係る産業がより潤い、釜石の魚と言えば「サクラマス」と言われるように我々も携わっていきます。

サクラマス養殖への想い

釜石はまゆりサクラマス



令和2年に始まったサクラマス養殖も2期目を迎えたが、1期目、2期目と無事水揚げすることができました。

また、釜石地域サクラマス海面養殖試験研究コンソーシアムでは、サクラマスの名称も「釜石はまゆりサクラマス」とすることを発表しました。

この名称には、東日本大震災からの津波を乗り越えて咲くはまゆりの力強さに、復興への想いや養殖の発展への願いが込められています。

この想いの下「魚のまち」の復活を目指し、サクラマスが地域資源の一つとなるよう、引き続き、サクラマス養殖に取り組んでいきます。

問い合わせ 市水産農林課 水産振興係 ☎ 27-8427



① 餌の捕食状況を見ながら、餌やりをします ② 水中カメラを使って、魚の様子をリアルタイムで観察
 ③ 月に1度のサンプル採取では、大きさや重さなどから生育状況を判断 ④ 出荷時は、船上で活めを行い、鮮度を保ち、重さごとに分類

ひと際うまいサクラマスを

なぜ釜石で養殖を？

釜石で養殖をしようと思ったのは2つの理由があります。1つは、岩手県は水温が低いところを好むサケ養殖に向いている背景があったからです。水温が低い環境があるということ、それは、それだけ長くサケを育てることができるといいうこと。地形の利点は大きいです。

2つ目は、釜石で定置網を続けるためです。我々の会社は、代々定置網をなりわいにしてきました。しかし、海洋環境の変化により、それまで主要魚種であったサケの不漁など、釜石の定置網の収益はあまり良くないのが実情です。ルーツがある釜石で、定置網を続けるためにも、別な分野でそれをカバーできればと考えています。

サクラマスを選んだ理由

以前から在来種でやりたいという想いはありました。すし店やスーパーなどでも、サーモンを良く見ますが、あれは元々海

外をルーツとした養殖のサーモンです。そのため、在来種の中でひと際うまいサクラマスでできればと思っていました。

養殖を行う上での工夫

魚の様子を24時間体制で観察し、水温や日照、塩分濃度、また酸素量などによって、魚の捕食状況がどう変わるかをデータで集め、これをAIに蓄積して、将来的には魚が餌を欲している時に餌を自動的に与えられるような環境を目指しています。これをする事で、周辺の海洋環境を守ることもつながります。

目指すべき姿

現在のサクラマス養殖は試験養殖なので、年間30トンほどの水揚げですが、来年度からは事業化し、いずれば1000トンほどの水揚げにしたいと考えています。

しかし、現在の養殖事業をずっと続けていけるかは疑問が残るところです。魚類養殖には

有限会社泉澤水産
 代表取締役
 泉澤 宏



大量の餌が必要で、材料の多くは天然資源です。この先も水産資源が減少していくとすれば継続は困難だと思えます。水産資源を増やす努力を行い、定置網漁業と養殖漁業を組み合わせた漁業経営で、現状を乗り切ることが重要と考えます。
 最終的には、以前のように定置網で魚が安定的に取れるような環境にし、さかなのまちを復活させることを目指しています。それまでは、定置網が不漁な部分を養殖で補っていかれると思っています。